

◇男神天照大神の正体

『神道集』熊野権現の事と「熊野権現垂迹縁起」

一、天竺のマガダ国大王は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、「我が身はどこへ行けばよいのか決めかねている。この剣を投げて、落ちた所に行こう」と言つて五本の剣を北に向けて投げ、空飛ぶ黄金の車に乗つてこれを追いかけた。

五本の剣は日本に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神蔵（神倉山）、一本は筑紫の英彦山、一本は陸奥中宮山、一本は淡路の和（遊鶴羽峰）、残る一本は伯耆大山に留まつた。大王の車は、五本の剣を追いかけて英彦山に到つた。そこから各地を転々として、最後は第一の剣に従つて紀伊国牟婁郡（熊野）に留まり、神武天皇御世に熊野権現として顕れた。彼の権現は天照大神の頃の人であるが、示現された土地は全国に広く行き渡つてゐる。

一、唐の天台山の地主神・王子信が鎮西英彦山に天降つた。その者は高さ三尺六寸で八角の水晶形をしてゐた。ついで、伊予の石鎚峰から淡路の遊鶴羽峰に渡り、さらに熊野の神倉峰に降つてきた。約百二十年後、大斎原（本宮旧社地）の一位木の梢に三枚の月形となつて降臨された。

〔地元の伝説〕（和歌山県新宮市）、「神武天皇は、神倉山に登つて十握剣（一説では経津御魂）を捧げ持ち、天照大神（一説では高皇産靈）にお礼の言葉を申し述べた」

〔熊野縁起〕、「熊野権現は、伊勢大神と団体である」

『出雲国風土記』は、出雲郡杵築郷杵築大社について、「神々たちが集まり、所造天下大穴持のお宮を造つた」、意宇郡出雲神戸も「伊奘諾の日真名子・熊野櫛御氣野、所造天下大穴持の二所のお宮に献じ祀る民戸」と記す。結局、当初の杵築大社はこの二神を祀つていたわけだ。さらに島根郡加賀郷には、「佐太大神のお生まれになつた所」、「神事芸能」大社の段では、「天照大神の生所とするために、加賀の潜戸と名づけた」とある。要するに、大穴持Ⅱ佐太大神、天照大神

〔三輪山縁起〕、「当社と伊勢は一体異名炳然なり」、「当社大明神と日吉山王は同体」、

〔三輪大明神は大日如来と同体〕、「大己貴尊の三輪への降臨は、伊勢より早く神代のこと」

〔大神（おおみわ）神社〕（奈良県桜井市）、祭神は、蛇神、水神、雷神とされる大物主大神、配神は大己貴神と少彦名神。拜殿と三輪山との間に三輪鳥居があるのみで、神殿をもたない。

当社から三輪山に登る山道には数々の磐座が点在して、まるで集団墓地のごとくに見える。この磐座は大きくは三群から成っていて、山頂に近いものから順に、奥津磐座・中津磐座・辺津磐座と呼ばれ、それぞれ大物主大神（本書では三輪大物主、倭大物主の大穴持、日本大物主大神の火明饒速日）、大神大物主の大己貴、少彦名（天孫天火明、海幸彦、火明）を祀るとされる。

〔伊雑（いざわ）宮〕、徳川期の朝廷や将軍に訴状を出し、こう主張してきた。

「伊雑皇大神宮は日本最初の宮であり、後に内宮ができ、ついで外宮ができた」、「当宮は天照大神を祀り、内宮の別宮（天照大神の遥宮）である。伊勢太神は当地から遷された」

〔熱田神宮〕、天璽だった草薙剣を祀る。主祭神は、熱田大神。相殿の神は、天照大神、素戔嗚尊、日本武尊ら五柱。草薙剣（一説では天叢雲剣）は、大日如来（天照大神）の姿であるという。

明治以降、神宮や明治政府の見解では、熱田大神は草薙剣を依り代とした天照大神と見ている。

〔熱田縁起〕、「熱田明神は、熊野権現、伊勢太神と一体分身である」、

〔熱田明神の大日如来は、天照大神であり、天叢雲剣にほかならない〕

〔真言宗本地垂迹説〕、内宮天照大御神〓胎藏界の大日如来、外宮豊受大神〓金剛界の大日如来

〔日吉大社〕、東本宮大山咋より、三輪山から勧請した西本宮大己貴が上位の神と見なされた。

〔山王神道〕、山王権現〓釈迦の垂迹と見る。

〔伊勢神道〕、豊受大神〓天御中主、国常立であるとし、内宮の天照大神より上位としてきた。

〔山王一実神道〕、家康に仕えた僧天海は、「山王権現は大日如来であり、天照大神」と提唱した。

〔籠（この）神社〕（京都府宮津市）、主祭神は、彦火明命。相殿に豊受大神、天照大神、海神、天水分神を祀る。神代の鎮座地は眞名井原にあつて、そこに鎮まる奥宮（眞名井神社、外宮元伊勢）は、豊受大神を祀る。かつて天照大神を祀つてきた眞名井原の与佐宮も内宮元伊勢とされる。

七一九年、眞名井原から現在地に遷座して社名を籠神社、主祭神を彦火明命に改めたと伝わる。

〔熊野権現と伊勢太神が同体か否かの議論〕、後白河院が熊野行幸を始めた一一六〇年の三年後に、議論が沸騰した。結果はこれを否定するところに落ち着いたが、果たしてそうだろうか。

〔法皇熊野那智山御参詣事〕、花山法皇が熊野の那智山に籠つて千日修業していると、彼のもとに龍神が降つてきて、如意宝珠・水精の念珠・九穴のアワビを献じた。このアワビを食すると、不老長寿が叶うとされてきた。

法王はその宝珠を岩屋に、アワビを那智滝の滝壺に沈めさせた。九穴のアワビを食した者だけが不老長寿になるよりも、滝の水を口にする者全てが延命になるよう願つてのことらしい。

〔雲陽秘事記〕、「松江藩城主・松平直政（家康の孫）が杵築大社に参詣した折、国造の制止を聞かずに無理やり御神体を覗き見ると、それは九穴のアワビのようだったが、たちどころに巨大な大蛇に変身した。直政は畏れて逃げ出した」

〔天照大神男神説〕、伊勢神宮に納める天照大神装束↓男性用。祇園祭岩戸山の天照大神↓男性
〔金刀比羅宮〕（香川県仲多度郡）、金毘羅宮と称して大物主命を祀る。金毘羅は梵語クンピーラに由来して、その正体は仏教の守り神と化したガンジス川の鰐、姿かたちは魚身で蛇とされる。

〔伊雑宮〕（三重県志摩市）、皇大神宮別宮の一社。天照大神の遥宮と呼ばれる。『ホツマツタエ』も、「天照大神が志摩磯部に宮を置いた」と伝える。伊雑宮の御田植え祭当日、七匹の鰐が的矢湾から川を遡つて伊雑宮の大御田橋に姿を現すという。この鰐は伊雑宮の使い、龍宮の使いとされた。今も続く七本鮫信仰は、天照大神率いる七隻の艦隊に畏敬の念を抱いて始まったという。